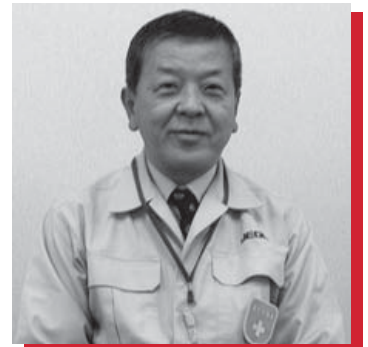


社員に快適な職場となるためのプロセス

日本電子株式会社 総務部安全健康グループ長 江口剛史さん

ナノテクにチャレンジしている日本電子株式会社。電子顕微鏡の開発会社として発足以来、理科学機器メーカーとして、科学技術の進歩を支えてきた企業だ。現在総務で活躍している衛生管理者の江口剛史さんは、20年余り機械技術者として現場経験の持ち主であるという。現場を熟知した江口さんの活動をご紹介します。



事前の対応で予防

今回は、衛生管理者の立場から産業保健を進めるにあたってのプロセスについて伺った。「まずは大きな目標、例えば労働災害をゼロにするであるとか、職業性疾病をなくすといったものを設定しています。そして、その目標にどうやったら近づくことができるかを検討する。予防対策として職場巡視などを活用し、前に落とし込んで対応するようにしています」。何かがもたらす結果をイメージして、その前に対応する。例えば、有機溶剤を使用している現場の場合、一番確実なのは疾病原因や災害原因のおそれのある業務をなくすことである。しかし、ビジネスではその業務をなくしてしまうわけにはいかない。そのために、まず日常的に職場巡視を行い、現場にて①リスクの少ない代替品に換えていくこと、②使用頻度を減らすことで対応をする。以上のような予防対策をしたうえで特殊健康診断（産業医）へつなぐという具合である。「職場巡視は、変化を察してタイムリーに実施することが重要だと思う。例えば、特にみんなの集中力が欠けていそうなときに行うと予防につながり効果的です。サッカーのワールドカップの時期には、よく放送の翌朝に巡視をしましたよ」と江口さん。

コミュニケーションで土壌形成を

そこで、これらの仕組みを社内に浸透させていくためのヒントをお聞きした。「まず念頭においてもらいたいの、衛生は安全と違って目に見えて効果が表れるには時間がかかるし個人差が大きいということ、そしてその効果を測る定量的な尺度が難しいということです。ともすると活動展開が難しいことも事実です。しかし、私には幸いなことに、これらを理解してくれるトップや仲間がいます。安全衛生委員会や専門の部会などの場で、

『皆さんは一日の1/3以上に当たる時間を職場にいます。その時間を明るく健康に過ごしたいでしょう。だから、健康に働いてもらうためにもこういったプロセス即ち目標からの展開が必要である』といった具合に話をする時もあります」とのこと。周囲への理解を得られるための土壌づくりがポイントといえよう。「いくら一人で声を出しても、江口がいつている、で終わってしまいます。まず理解者となる仲間を増やしていくことです。そのためには、コミュニケーションは欠かすことができません。何にでもいえることですが、仲間というものは、10人いればうれしいことも10倍、辛いことは1/10になるでしょう」と柔和な笑顔で答えてくださった。

さらに産業保健活動に関して江口さんはこういう。「活動は能動的にとらえ、どうしたら改善するようになるか、よく本質を考えることなのではないでしょうか。例えば法律がこうであるからといった観点はなく、健康でパフォーマンスを向上させていくための管理をよく考えて活動していくと、結果的に法令順守となるのではないのでしょうか。そこが衛生管理者の面白いところです」



取材時、江口さんは「私は不勉強でして…」と謙遜されていた。しかしその実は、東京衛生管理者協議会（以下協議会）に足を運ぶなど、多角的な方面から研鑽されている。協議会からも平成22年の7月のセミナーでシンポジストとして声がかかるほどであるという。ちなみに「産業医と衛生管理者との連携について」というテーマ。ページの関係でご紹介できないが、読者にとって関心の高いテーマであるので、触れさせていただいた。